

## 台風の子と過ごした夏

和泊町立和泊中学校 三年 宮元 蓮実

風の匂いの中に、潮の香りが混じる。私は左手をそっと上げ、太陽の光を確かめた。ああ、暑い。今年もまた、夏が来る。

家の裏のソテツに、黄色い花が咲いた。じいちゃんはこの花を見るたび、私にこんな話をしてくれる。

「南海、ソテツの花がよく咲く年は、台風の当たり年なんだ。今年はたくさん雨が降るぞ。」

その時、急に大きな風が吹いた。髪の毛が浮き、服のすそがバタバタと音をたてる。思わず閉じた目を開けると、そこにクワズイモのお面がいた。

「お化けだっ。」

「違うよ。」

クワズイモのお面が叫んだ。よく見ると、そこにいたのは、クワズイモのお面をつけた小さな男の子だった。男の子はお面をはずして言った。

「初めまして。僕、風太郎。」

風太郎が笑う。

「風太郎……。風太郎はどこから来たの。」

「どこからでも。だって僕、台風の風太郎だもん。」

台風。この小さな男の子が、台風の子ともだとも言う

うのだろうか。目の前にいる風太郎は、私よりもずいぶん小さい。

「そうなんだ。私は南海。南の海って書いて『みなみ』。九才だよ。」

「ねえ、一緒に遊ぼうよ。僕、南海の名前気に入った。」  
風太郎が、楽しそうに笑う。

風太郎は、本当に足が速かった。手を引っ張られる私のほおに、風がびゅんびゅん当たる。自分が風になったみたいで、すごく気持ち良かった。その後、私たちは砂浜で鬼ごっこをし、丘の上で缶けりをした。しげみの中でかくれんぼもして、気がついたら、日が暮れていた。

「風太郎、私、家に帰らなきゃ。」

「ええっ、僕、もつと遊びたい。縄とびも石けりも、まだやっていないよ。」

風太郎が泣きそうな顔になる。

「大丈夫、明日もまた遊ぼう。」

とたんに、風太郎は笑顔になった。

夕食の時、お父さんと大兄が話をし始めた。

「梅雨が終わってから、まだ一度も雨が降らないなあ。このままだと、さとうきびが枯れてしまう。それに、ため池の水も少なくなってきた。」

「でも、父さん、遠くの家でも台風が発生したらしい

よ。雨を連れてきてくれないかなあ。」

次の日も、また次の日も、私は風太郎と一緒に遊んだ。風太郎と出会ってから一週間がたった頃、私はあ  
ることに気付いた。

「風太郎、初めて会った頃より、大きくなっていない。」  
私より小さかった風太郎が、今では私と同じくらいの  
身長になっている。風太郎もうなずいた。

「僕、最近雨も降らないし、台風もこないし、力が弱  
くなっていたんだ。でも、今、この島の近くにすごく  
大きな台風が来ていて、ちょっとだけ力が強くなつて  
いるの。あの台風がここを通れば、僕、もっと大きく  
なれるよ。」

「そんなに大きな台風が来るの。」

「うん。三日三晩、雨と風がすごいよ。」

そこで、風太郎はニコツと笑った。

「ねえ、南海、あの丘まで競走。」

言うやいなや、走り出す風太郎。あれ、でも確か・

「だ、駄目だよ。止まって。」

止まって、止まってよ、風太郎。だって、その丘の向  
こうは崖なんだから。寸でのところで、風太郎の左腕  
をつかむ。その勢いに、南海の体が前に飛び出してし  
まった。

「南海。」

おそろおそろ崖の下を見ると、遠くに南海の姿が見え  
た。うつぶせに倒れていて、動かない。助けなきや、  
誰かを呼ばないと。僕は、必死になって走った。南海  
の家が見えた。僕と南海が初めて会ったあの縁側に、  
誰かが座っていた。南海のおじいさんだろうか。

「たつ、助けて。南海が大変なの。」

「君は・・・。」

痛いよ、体が自分のものじゃないみたい。指一本も  
動かせないよ。どうしよう。お医者さんの声が聞こえ  
る。

「この島では治療ができません。本土の大きな病院へ  
すぐに行ったほうがいい。しかし、台風接近中のため、  
ヘリが飛ばないのです。」

助けて、風太郎。

その晩から大雨になった。

「お父さん、雨が降って、さとうきびは喜んでいるけ  
れど、南海が・・・。」

病室の前で、お母さんが泣いている。

「島にとっては、恵みの雨なのになあ。」

お父さんもせつなそうにつぶやいた。

その頃、風太郎は天の神様をお願いをしていた。

「天の神様、どうかお願いします。台風の進路を変え  
て、南海を助けて。ヘリが飛ぶようにしてほしいの。」

一生懸命天に向かって叫び続けたその時、一筋の光が風太郎を照らした。

「風太郎、本当にいいのか。進路を変えらということかどうか、分かっているのか。」

「はい、神様。」

翌朝、ヘリは飛んだ。バケツをひっくり返したような大雨が、ぱたりとやんだのだ。台風が進路が直角に曲がって、ぐんぐんスピードを上げて遠ざかっていき、私を乗せたヘリは、急いで本土の病院へ向かった。退院したのは、八月の末。だけど、風太郎にはそれつきり会えなかった。

その後、じいちゃんから聞いたんだけど、じいちゃんも子どもの頃、風太郎と遊んだらしい。その年も雨が降らなくて、そんな時、じいちゃんは見たんた。風太郎が天の神様をお願いをしている姿。僕はどんなってもいいから、台風をよんで雨を降らせてくたさって。その後台風が来て、みんなは喜んだけれど、風太郎とは二度会えなかったって、じいちゃんは言っていた。

大人になり、私は島を出た。けれど、夏になれば毎年戻ってくる。家のソテツが一斉に咲くとき、また風太郎に会える気がするから。私はまだ、風太郎にありがとうって言っていないよね。

船を下り、港に立つ。風の匂いの中に、潮の香りが混じる。私は左手をそっと上げ、太陽の光を確かめる。ああ、暑い。

今年もまた、夏が来る。

